

「横槍」

—二稿—

2025/7/23

さいの

〈人物表〉

工藤 晴人くでう はると

(22)

居酒屋でアルバイトする大学生

佐藤 雅史さとう まさし

(21)

晴人のバイト仲間で大学同期

飯田 杏菜いいた あんな

(21)

晴人のバイト仲間

石川 佑生いしかわ ゆうせい

(35)

晴人のバイト先の店長

1. 居酒屋・店内（夜）

個人経営の小さな大衆居酒屋。

飯田杏菜（21）、若い男性客の注文を取っていて、

客1 「えー、お姉さんの連絡先って頼めますか？」

男性客たち、いやらしく盛り上がる。

杏菜 「すいませんあの、ご注文」

工藤晴人（22）、割って入って、

晴人 「（笑顔で）僕のでよければ教えますけど」

客1、舌打ち。

客2 「うわ、萎えるわ」

客3 「え、彼氏？」

晴人 「だったら面白いんですけどねー」

客4 「え、じゃあ付き合っちゃえば？」

客ら、盛り上がる。杏菜、晴人に目配せして苦笑い。

佐藤雅史（21）、その様子をキッチンで見ている。

2. 居酒屋・控え室（夜）

雅史と杏菜、なにやら話している。

雅史 「おっけ。楽しみにしといて」

と、嬉しそうなところに晴人、入っていく。

雅史、晴人に慌てた様子で、

雅史 「じゃ、お疲れ」

と、立ち去る。

杏菜・晴人「おっー」

杏菜、曖昧に笑っていて、

杏菜 「断れるようになりたい」

晴人 「……さっきの客の話？」

杏菜 「ううん」

3. 帰り道（夜）

晴人と杏菜、並んで歩いていて、

晴人 「奥多摩で、バーベキュー？」

杏菜 「うん。藤倉さんと峯岸さんと」

晴人 「誰？」

杏菜 「遅番の人。四年同士で付き合ってる」

晴人 「へえ」

杏菜 「あと雅史と、私」

晴人 「だけ？」

杏菜 「うん」

晴人 「だけ？」

杏菜 「え、やっぱそういうこと？」

晴人 「うん。雅史、やってんな」

杏菜 「（頭を抱えて）だよなあ」

晴人 「で、断れなかったんだ？」

杏菜 「……すごい熱心で、申し訳なくなったというか」

晴人 「まあ、分かるけどさ」

杏菜 「え、工藤くんも来てくれたりはしない？ お願い」

晴人 「それは雅史に悪いって」

杏菜 「大丈夫。誘いたい人いたら誘っていいとは言ってた」

晴人 「良くないやつなんだよ。それは」

杏菜 「でもいきなりダブルデートはさ、おかしくない？」

晴人 「んー、まあ」

杏菜 「別にうやむやにするとかじゃないから。正直乗り気ではないけど、そういうのは丁重にその、あれするから」

晴人 「丁重に？」

杏菜 「……断るというか」

晴人 「なら今断った方がいいだろ」

杏菜 「それはかわいそうじゃん？」

晴人 「……分かん」

杏菜 「段階踏もうよってこと。補助輪が必要な。工藤くんが」

晴人 「その補助輪いる？ 次に進む気ないのに？」

杏菜 「夏っぱいことはしたい。ダブルデートは無理」

晴人 「（呆れて）俺、その日シフトなんだけど」

杏菜 「……分かった」

4.

居酒屋・控え室（夜）

石川佑生（35）、ボケっと団扇を仰いでいて、

晴人 「店長、ちょっといいですか？」

気まずそうな晴人と、その後ろに杏菜。

石川 「ん？ どうしたエースと看板娘」

晴人 「……来週の火曜なんですけど」

杏菜 「（思い切って）あの、その日、お店休みにしません？」

石川・晴人 「は？」

5. 奥多摩・マス釣り場（昼）

自然の川を堰き止めただけの野趣溢れる釣り堀。

石川、釣り竿にアタリ。急いで引き上げる。

糸を手繰り寄せると、マスが釣れている。

石川 「いやー、晴人くん企画ありがとね」

と、晴人に手を振る。満面の笑み。

晴人、苦笑いで手を振りかえす。

周囲にはマス釣りに興じている居酒屋スタッフが、他にも十名弱。賑やかな大所帯になっている。

晴人 「……補助輪、付けすぎじゃない？」

雅史、歩み寄って、

雅史 「お前さ、どういうつもり」

晴人 「その、たまには親睦を深めないと？」

雅史 「トボけんな」

晴人 「いや、横槍入れたみたいな風になってしまっでごめん」

雅史 「みたいな風にじゃねえだろ」

晴人 「本当、ごめん。というか俺が企画したってわけじゃ……」

雅史 「（ハッと真理に気づき）お前、杏菜と、そういうこと？」

晴人 「（否定して）いやいやいやいや」

雅史 「やっぱそうなのか？ ならはっきり言ってくれよ」

晴人 「違うって」

雅史 「……本当だな？」

晴人 「うん。あの、どうにかするから」

6. 奥多摩・マス釣り場・休憩場（昼）

晴人 「なんで俺が責められてんの」

杏菜 「ごめん。店長に乘せられて誘いすぎた」

晴人 「その行動力があって、なんで最初から断れない」

杏菜 「だからそれはかわいそうだし……」

晴人 「今この状況のがかわいそうだろう」

杏菜 「賑やかで、楽しくない？」

と、屈託なく。

晴人 「馬鹿なのか？」

杏菜 「え？」

晴人 「アイツもさ、一応友達なんだぜ？ 必要以上に傷つけん

なよ。俺も何やってんだ……」

藤倉・峯岸カップルの横で雅史、しょぼんと釣竿を

垂らしている。

杏菜 「いや、だから、丁重に向き合いはする」

晴人 「言ったな？ そこは筋通せよ？」

7. 奥多摩・バーベキュー場（昼）

四人掛けのバーベキュー卓を三つ占領している一行。

杏菜と雅史、藤倉・峯岸カップルと同じ卓。串に刺

された焼き魚を齧りながら談笑している。

雅史、先ほどと打って変わり元気に盛り上げている。

晴人、隣の卓でその様子を見ている。

石川、晴人の横に忍び寄って、

石川 「（小声で）俺さ、全然そういうの分かんないけどさ、あ

いつらってできてんの？」

晴人 「え？」

石川 「ほら。え、教えてよ」

と、杏菜たちの卓を顎で指す。

雅史 「（ギャグを披露して）ブラジルの人、聞こえますかー？」

藤倉・峯岸、拍手。

雅史 「ちょっと、ここ笑うところだって」

杏菜、苦笑い。雅史、満足げに隣に座る。

石川 「結構お似合いな気がする」

晴人 「いや、多分そういうんじゃない……」

石川 「でもこの前さ、一緒に帰ってたんだよね」

晴人 「そう、なんですか？」

石川 「ほらほら、今、アーンってしなかった？」

晴人 「え？」

石川の指の先には、藤倉・峯岸。

石川 「……絶対そうだと思うんだけどな」

晴人、ズコッと肩を落とす。

杏菜と雅史、二人でどこかへ立ち去る。

8.

奥多摩・喫茶店（昼）

木漏れ陽に照らされたログハウスの喫茶店のテラス。

杏菜、四人掛けテーブルに一人で座っている。

晴人、杏菜の向かいに座って、

晴人 「お疲れ」

杏菜 「……付き合うことになった」

晴人 「ふーん。え？」

杏菜 「なんか急に二人きりのとこ連れてかれて」

晴人 「丁重に、じゃなかったの」

杏菜 「びっくりしちゃって、流れで」

晴人 「お前それは本当にダメなやつ」

杏菜 「え、どうしよう。どうしたらいい」

晴人 「もう知らねえよ」

杏菜 「ねえ、助けて。お願い。どうすんの？」

晴人 「断れるようになりたいんだろ？」

雅史、トレーに乗ったパフェや飲み物を持って和かな表情で登場。後ろには藤倉と峯岸。

雅史、晴人を睨む。晴人、察して立ち上がり、

晴人 「あ、ごめんね」

と、空気を読んで立ち去ろうとする。

杏菜、意を決して立ち上がり、

杏菜 「雅史、さっきの、やっぱりごめん。流れで言っちゃった

けど、付き合えません。ごめんなさい」

晴人 「……それ、今言うかよ」

（おわり）